

河 奴

か

やつと

平成 8 年 12 月

京都大学カヌー部OB会

京都大学カヌー部OB・OGの皆様ならびに現役の諸君へ

平成8年度の「河奴」をお届けします。

今回はこれまでお願いしながら寄稿いただけなかった方を中心に、再度寄稿をお願いしました。幾分不安でしたが、やってみるもので、大勢の方から原稿が寄せられました。ご協力本当に有り難うございました。

今年の写真はカラーです。当然コストアップになりますが、せっかく面白い写真を提供いただいても白黒では興味半減ですので。ご異論がなければ今後もカラーにします（コスト面から文中の写真も前に出しました）。

今年の現役は4回生を除くと7名で、相変わらず厳しい状況です。OB・OGの支援と言っても何が出来るか、難しいところですが、京関OB戦などのイベントに大勢参加して戴くことが支援の手始めになるのでしょうか。

さて、私事を振り返ると今年最大のドジは関東忘年会の曜日を間違えてしまったこと。顛末は山崎君の原稿(P-27)に紹介されていますが、何とも申し訳ないことでした。そんなわけで今年の忘年会の様子はご紹介できません。来年（平成9年）は12月5日（金）、場所はいつもの通り「巣」です。幹事は山崎君にお願いします（貴君の原稿、無修正で載せるからご勘弁を）。関東忘年会は毎年12月の第一金曜日、**金曜日**……。

例年の事です、OB会費の納入をお願いします。就職している方は5千円、就職していない方は1千円です。区分は自己判断いただき、同封の振込用紙などで送金願います。

肝心の会費の納入状況ははなはだ良くありません。私も含め、つい忘れてしまう方が多いのではないかと思います。そこで、次回からは自動振り込みも出来るようにしてはどうかと考えています。全OB・OGが確実に納入すると会費の値下げも可能、初漕ぎの際に皆さんにお図りします。

OB会の運営、河奴の編集、会費の納入方法などについて、下記までご意見をお寄せ下されると助かります。

E-mail:KGE00351@niftyserve.or.jp、Fax:0424-95-0903

（平成8年12月 OB会会長 後藤洋三）



練習風景



練習風景



合宿所内の風景



来期はVか？



Pitch?・・・Dash!! (p-11~13)



優勝 「河奴」号 タイム0分47秒 (p-20~22)



那珂川カヌーツアー (P-25~26)



那珂川カヌーツアー (P-25～26)



カシタス湖畔にて（1993年12月24日撮影）（p-36～38）

目 次

文 庫 寄 稿 文

OB寄稿文

京都からの便り	藤田茂夫	—	1
無 題	高村基治	—	4
近況—メディアへの想い	青木謙治	—	7
ソウル駐在半年の記	山本桂嗣	—	9
カヌーでの国際交流の思い出など	清野 学	—	11
ファルトボートで沈したこと	島田 潔	—	14
K君とのペアの思い出	西村光一	—	16
私のカヌー時代と今	上坂政章	—	17
鳥取からの報告（その1） 段ボールカヌー大会奮戦記	森 正雄	—	20
鳥取からの報告（その2） 鳥取大学での1年半	福井茂寿	—	23
那珂川カヌーツアー報告	山崎裕司	—	25
つくばマラソン	古川潤一	—	27
雑 感	木之内秀彦	—	29
近 況	佐藤昭彦	—	31
「上海だより」	美浦 匡	—	33
「琵琶湖でカヌーを漕ぎました」	小西 俊	—	35
ロサンゼルスオリンピックカヌー競技開催地訪問記	小山泰弘	—	36
カヌー部発、天草経由、石垣島	高田宜武	—	39
水の誘惑	東野真和	—	41
カヌー部の思い出	新井麻紀子	—	42
西部BOXを偲ぶ	六車和彦	—	43
近況報告	大高健一	—	45

カヌー4年間について	矢部泰二郎	—	47
主将になって	宮本拓平	—	48
部員紹介	樋口太郎	—	49
平成8年度活動報告		—	52
平成8年度戦績		—	53
京都大学カヌー部OB会平成7年度会計収支報告		—	55
京都大学カヌー部OB会平成8年度会計収支中間報告		—	55
京都大学カヌー部OB会名簿		—	56
京都大学体育会カヌー部現役名簿		—	75
住所、勤務先変更届け用ハガキ			
88 — 表参道			
78 — 西荻野山			
78 — 一ツ木川古			
88 — 表参内土木			
18 — 表参道			
88 — 国 前美			
78 — 対 西小			
88 — 表参道小			
88 — 知宜田高			
14 — 表参道東			
84 — 千歳和共産			
84 — 表参道六			
74 — 一ツ木高			

京都からの便り

藤田 茂夫（部長・S41年卒）

「河奴」がお手元に届くころは、冬も盛りで厳しい寒さに見舞われていることでしょうが、こうして、毎年原稿を依頼される時期は、深まりゆく晩秋の盛り、京都はまた紅葉の盛りで市外府外からさらには海外から観光客がどっと京都にやってくる時期でもあります。それほど、京都の晩秋は限りない魅力で人を惹きつける何かがあるのでしょうか。それが古都千年の重みとでも言うのでしょうか。私の住みかは京都の伏見ですが、京都生まれの京都市育ち、その重みをそれほど感じることはありませんし、幾多の名所旧跡へはいつでも行ける環境にあるわけですが、紅葉狩りなど、ここ20年ほど行ったことがありませんでした。ところが、11月下旬、東京から10人ほどのVIPを京都に招いて会議をするというひょんな機会を得ましたので、この機会をとらえて、京都の東山の晩秋を楽しんでもらおうということになり、私も久しぶりに紅葉狩りをする機会に巡り会えました。高台寺の夜のライトアップと、その翌日、南禅寺、永観堂、さらには哲学の道をへて真如堂まで散策したのですが、とくに高台寺のほぼ中央にある池にライトアップで映し出された紅葉混じりの境内は、幽玄の世界を醸しだし名状しがたい見事なもので、VIPの方々は心が洗われる思いだと絶賛を博し、京都の奥深い悠久の境地にお誘いすることができました。河奴の読者の皆さんも京都に帰洛の機会があれば、気分転換にもう一日滞在を延長して京都周辺の散策を是非お勧めいたします。

京都大学も、内面的にも外面的にもずいぶん大きな変化が押し寄せています。昔の教養部のグラウンドの南側に立派な人間・環境学研究科の建物が建ちました。程なく総合人間学部の建物も改築の運びとなることでしょう。本部構内には、8階建ての工学部および文学部の建築工事が真っ最中です。将来的には、本部構内の建物がほとんど8階建てに改築される計画になっています。また、京都大学百周年を迎え、時計台から本部事務が移転し、

あとに国際会議場などの施設が設置される予定となっています。もっとも、その規模は、募金の集まり具合に依るそうです。私も14万円の寄付を500円玉を半年かけて貯金し納付したところです。しかし、吉田キャンパスの建築計画が完成しても、学部組織をもつ大学院大学化、すなわち大学院重点化を推進するためにはなお施設面積が不足するため、現在宇治地区の再開発や、新しい第3キャンパス候補地として、桃山丘陵や、京阪名関西学術研究都市への移転問題が検討されております。しかし、第3キャンパス問題に目途がつくのはまだまだ時間がかかりそうです。一方では、建物も持てない大学院も出ています。学際的な教育研究組織として昨年設置されたエネルギー科学研究科は、その典型的な例です。一刻も早い施設の完備が望まれています。新しい大学院の設置は、エネルギー科学研究科だけでなく、現在情報学研究科、材料科学研究科、バイオ関係研究科などが計画され、従来の縦割り研究科、すなわち工学、理学、農学、医学、経済学、などの枠組みから、エネルギー、情報、材料、生命、環境、都市機能といった目的指向型の、かつ横糸的連携指向型の枠組みへの再再編が模索されようとしています。これから将来にわたって地球上のありとあらゆるさまざまな問題を解決するためには、明治以来確立された従来の縦割りの教育研究体制では不可能で、従来学問領域間の融合を図る学際的組織の確立が急務となっているとの認識からです。いま、大きな変革の過渡期にあるわけで、これが一応の落ち着きとその成果をみるのは、十年二十年とかかることでしょう。創造的科学技术立国の将来に関わるだけに、京都大学としても慎重な対応が求められるものと思います。ものの変革には組織とともに人間の考え方の変革、意識改革が必要なのです。

さて、毎度のことながら、カヌー部OBの諸兄にはカヌー部に対しましてご高配を賜り、カヌー部を代表しまして、厚くお礼申し上げます。現在カヌー部は創部以来33年を経てきたわけで、この間培われてきたカヌー部精神とも言えるべき伝統は、OB諸兄の努力の賜であると思います。しかしながら、近年カヌー部への新入部員の数が増減し、ついに今年度は現役人数が10人を割り、カヌー部そのものの存続の危機に直面しております。も

とより、その責任の一端は部長としての私にもあるわけですが、今日の学生気質の変遷により、一部のクラブを除き体育会全体に関わる問題でもあります。電気系教室には、今は飛ぶ鳥も撃ち落とす勢力を誇るアメリカンフットボール部（ことしの3月で定年）、柔道部、バレー部の部長を勤める教授がおりますが、アメフト部を除いて共通の悩みを持っております。しかしながら、特に我がカヌー部は、部員の減少傾向を押しとどめ、望むらくは増加傾向にまで持っていく有効な手だてに窮しているところであります。現役諸君は、拠点拠点で新入生の入部勧誘の努力は致しておりますが、今までのやり方では入部学生的大幅な獲得は困難な状況にあります。現役諸君には随時ではなく常時勧誘体制を取ることによって、すこしでも現状からの打破を目論んでいるところです。OB諸兄におかれましては、このカヌー部への現状に対して、これを変える何か良いアイデアがありましたら、ご教示頂きますれば誠に幸甚に存じます。

高村 基治（S43年卒）

1996年も余すところあと1か月余りとなった。「河奴」への寄稿依頼を受けてみたものの、さて、何を書くかとなると生来の不精のせいかまとまった発想が湧かない。卒業して社会に出て今年は29年目に入っており「河奴」の名簿を見ても二十番台に位置している。あらためて見てみると随分と京大カヌー部のOBも増えたものと感慨もひとしおである。

これまでの「河奴」を取り出してきてパラパラとページを繰ってみるとOB諸氏の投稿は、部活動の思い出、卒業後の経過、近況等様々である。つらつら思い出してみるに、私のカヌー部在籍は教養時代の2年間に過ぎなかったが、その中にも自分なりにかなり濃縮された記憶もある。あれこれ思いあぐねて、結局私とほぼ同世代（50代）の諸氏がああこんな奴もいたな—と思いだして頂きかつ少しでも共感をもっていただけたらと思いつつ自分の健康まわりについてでも綴ってみようと思う。

もともと大学に入るまではまとまったスポーツなどしていなくて、また不規則な生活を送っていたこともあり入学当初は痩せこけた顔色の悪い青二才であったが一念発起、まずは体力づくりを目指してカヌー部の門を訪ねたことを思い出す。いろいろ考えた末、琵琶湖、石山寺、南郷等子供の頃からの馴染みの場所でのしかも当時まだまだ珍しかった水上スポーツということも選択の一要因であったと思う。

入部以後、毎日の吉田キャンパス内での陸トレ、午後から夕方にかけての艇庫へ出かけての練習（もっともかなりサボリ気味であったが）、そして春、夏の合宿や各種のレースこれらを通して2か年教養時代の終わる頃にはかなりしっかりした身体をつくることが出来たと思う。カヌーの戦績はあまりパツとしたものがなかったが所期の目標は達成出来たのである。

専門課程が私の専攻の事情で舞鶴にあったためカヌーの活動継続は断念せざるを得なかったがその後外洋ヨットをやり、その他テニス、スキー、草野球等社会人になってからもスポーツはずっと趣味として続けて来た。

— 50才の声を聞くまではほとんど病気らしい病気もせず元気にやってこられたのもこのカヌー部での体力作りのおかげだと思っているし、自ら腹いっぱい食べていれば躰は自然と動く、言うことを聞いてくれるという自信の中で何事にも前向きに取り組んでこられたこともこのカヌー部活動が一つの原点であると思っている。30才台、40才台とちょうど日本の高度成長期そしてバブルの全盛期とも重なり連日の残業や毎晩の酒の付き合いも今から振り返るとよくまあやってこられたものだとも思う。

しかしながらついに一つの節目が突然やって来た。約3年前である。

右足の裏に何かしこりの様なものを感じるなど思いはじめて2日目、足首から下がパンパンに腫れ上がり何もしなくてもズキズキと痛み、歩行不能 となってしまった。痛風のアタックである。それまでの2～3年定期の健康診断で尿酸値が高目であったのは指摘もされていたが、特に自覚する症状もないままに、他のチェック項目すべて問題なし、体重も65Kg前後をずっと維持しており肥満度も+1～+2と理想的ということで“まあ俺の身体は大丈夫だ”といった慢心があった様だ。従ってビールも肉系の食事なんら制限することなくどんどん飲みかつ食べていた。

医学書に依れば、痛風とは尿酸排出の代謝異常でビールや肉とくに牛肉はよくないとの事である。

齢、人間50. の声を聞くとどこかにガタが来ても仕方がないと実感した次第である。やはり肉体的にはだんだんとdown trendになっていくことを認識すべきであると思った。幸いにしてベンズブロマロンという優れた尿酸排せつ剤がありその後ずっとこれのお世話になっている。予防法の一つとして肥満防止がある。肥満は痛風のみならず他のいろいろな病気の原因ともなり要注意である。この年齢になって再度日常生活を見つめてみると運動不足が明白である。毎日の会社生活はほとんどデスクワークばかりで、たまの休日ゴルフなんぞは焼石に水みたいなものである。

そこでせめて通勤時少しでも歩こうと思い毎日二駅ばかり電車に乗らず歩いている。そして何とか65Kg前後の体重コントロールにこころがけている次第である。食事について言えば「三度の飯より好きな～～」という言葉がよく使われる様に人間にとって三食に対してはなかなか欲求の強

いものがあると思う。ただ日頃無意識の内に食しているわけだがそこに一度制限が入って来るとその欲望の強さを認識することが出来る。又常に腹一杯を満足感の物差しにしてきた私のような人間にとって、これらを八分目にもってくることの難しさを現時点では実感している。今後何年かのプランをもってそのような形へシフトしていかなければと思っている。いまの段階で実行していることはメニュー、言い換えれば食素材のバランスである。

和洋中、米食や麺類といった食事の変化や毎食ごとの食素材の種類や数等にも気を使っている。酒は「百薬の長」ともいわれるが、体に対する影響は飲酒時または長期的にも個人差がある。私もこれまで一度も禁酒をしようなどと思った事もなく、結構その方ではお付き合いのよいほうで今まできたが、それでも最近は週に1日か2日は休肝日を毎週はじめに決めて実行するようにしている。残された課題は一時の暴飲をどうコントロールするかだ。というわけで毎度の食事には食べる前から関心をもって臨み、納得して食べている。“まさに、美味しくたべて健康づくり”ということであろうか。

最後になったが、年があげれば結婚25年を迎える（古）女房どのと娘二人の女3人にかこまれて横浜の片隅に住んでいるので近くにお越しの機会には是非一声かけてください。

それではOBの皆様の益々のご活躍とご健康をお祈りしております。

近況－メディアへの想い

青木 謙治（S44年卒）

河奴へ原稿を書くのは、確か卒業時（1969年）以来ほぼ30年振りになるかと思います。昨年も依頼されたものの、すぐ海外に出かけたので今年こそはと今、出張先のホテルで早朝この雑文を書くことにしました。

タイトルは近況、これは後藤会長からの近況報告、仕事のPRなんでもよいとの指示に従って、最近感じていることなど、若い部員の方々へのメッセージのつもりで書いてみたいと思います。

卒業後、いわゆるゼネコンに入社、地下発電所、ダム、トンネルなど山の中で大型の土木工事の仕事に携わってきました。仕事のベースは技術研究所に在籍して、設計、施工管理、技術指導などから事業主体との折衝などこの25年間、国内外をつねに移動する生活が続いています。3日続けて同じ場所にいたことがないので、ひとはこれをプロのホームレスと呼びます。

さて、昨年、本社の土木技術本部という部署に移り、国内外の現場を統括する立場になり、とくに今年は東南アジア市場での現地法人の再編成のためしばしば出かけるため、例年に増して移動が多くなりました。

今年始めからミャンマーで大規模な水力開発のプロジェクトを手がけており、すでに4回にわたってミャンマーを訪問、各地に滞在しました。ここから本題に入りますが、いつも感じることは最近話題になるミャンマーという国に対する日本のメディアの報道姿勢と、その内容がごく一部分しか伝えていないのではないかということです。

ノーベル平和賞なる賞を受けたアウン・サン・スー・チー女史を民主化運動のリーダーととらえ、軍事独裁政権が民主化を抑圧しているという見方で経済的なサンクションを押しつける欧米の立場は必ずしもミャンマーという国の実態を正しく評価しているとは到底思えません。

ミャンマー（旧ビルマ）は戦後独立して、それまでの英国はじめ欧州の宗主国に対する反動から、ビルマ式社会主義を試行してきました。30年以上にわたるこの体制は（ソ連、東欧諸国にも見られるように）それ自体

の内部矛盾から大きな経済的行きづまりに到達したのが1988年です。この年の8月8日、ビルマ社会主義を率いてきたネウウィン大統領に対する国内の暴動が、いわゆるビルマ式社会主義を終結させました。

ちなみに、ビルマは現在7つの州と7つのディストリクト（管区）に分けられていますが、これはビルマ族、シマン族、カレン族などなど多民族のテリトリーにほぼ対応しています。すなわち、ビルマ国内の混乱は社会主義政策の行きづまりと共に、各民族の独立内戦の要素を含んでいたわけです。従って、1988年8月の暴動以後この国は内戦と多数の国が連立する分裂国家への道を進んだかも知れず、最近では東欧に、ボスニア以下多くの例を見るような状況になり得たと言えます。

この時に、軍が主体となって国家法秩序回復評議会(State Law and Order Restoration Course: SLORC)が設立され、各民族間の和解、統一と国全体の経済のたて直しにとりかかったわけです。この課程で、アウン・サン・スー・チー女史のNLDとSLORCとの行き違いがあったわけですが、現在のミャンマーの経済的な安定化、初等教育の普及、多民族の融和など、SLORCの果たした役割は正しく評価すべきだと思います。

日本のメディアが伝えるのはNLDサイドに立った報道が主体であり、日本国内にいと冒頭に書いたような、支配・独裁する側とそれにけなげに抵抗する側という対立の図式しか伝わってきません。とくに、外部からの固定観念だけで制裁云々を言うのは内政干渉に等しいことを論評するメディアも見あたらないように思います。

結局のところ、言いたいことは、メディアの報道はあくまで一部分を伝えているにすぎず、我々が事の本質を理解するためには、違う立場からの報道、情報あるいは自分の目で見て知るなど、あくまで自分自身の判断と評価を忘れてはならないと痛感しています。このところが国際的なビジネスの場であれ、アカデミックな交流であれ、彼我の微妙なずれを生むゆえんのひとつかと思います。

とりとめもない文章になりましたが、自分の目で見、考え、判断し行動する生活を多分これからも続けて行きたいとの自戒もこめて、身辺雑感を記しました。

現役の選手諸君のご健闘を祈ります。 1996年11月25日 札幌にて

ソウル駐在半年の記

山本 桂嗣 (S 4 4 年卒)

ソウルに駐在して半年、今朝8:00アパートを出発、約2Kmのオフィスへ向かう。有名な車社会のソウル、20分はかかる。オフィスはソウルの副都心、漢江の南の江南地区に位置する。ホテルインターコンチネンタルの正面にある Textile Center ビル16F (TEL 82-2-528-0555, Fax 同0557)にある。この地区は88年のオリンピック前後から急速に開発、去年は世界第2位の製鉄会社 POSCO 本社ビル(2万人が通う)も出来ている。

昨日タイ・香港から戻ったが、まだ自分の町に帰ってきたという気持ちには程遠い。しかし、外国に来ているという気分でもない。一種落ち着いた気持ちになっている。

ソウルには私同様、単身赴任者も多い。その人々にとってまず重要なことは食事。味は少々辛いものの、基本的には日本と変わらない。それ程抵抗はない。逆に韓国人にとっても日本料理は大好きで高級なものと位置づけている。特に寿司にさしみ。韓国人は食べ物だけではなく日本のものは何でも高級品扱いしている。

韓国では、日本と比べ古いものがより多く残っている、ともいえる。本物も残っている。酒にしても日本酒と同じ作り方であろうが、混ざり物がないためか、本来の酒の味がするようだ。地下鉄では若者は必ずお年寄りに席を譲る。

さて、コミュニケーションの基本は言葉であろう。週3回夜2時間、梨花女子大に通って5ヶ月。しかし、普段日本語か英語中心であるためか、韓国語はてんで話せない。日本語上手の秘書を雇った報いとも言える。60歳以上の韓国人の中には日本語を話せたり、理解できる人もかなりいる。小学時代に習ったこともあろう。では、現代の若者はどうか。日本と取引のある会社に勤務する人の中には日本語を勉強し話すことの出来る人はかなり居るようだ。高校や大学時代に学んだ人もいるが、個人や会社の援助で語学学校や教会に行き身につけるといふ。朝、地下鉄の出入り口では

語学院の宣伝のビラが毎日盛んに配られている。日本語を学ぶ韓国人の方が、日本で韓国語を学ぶ日本人よりもずっと多いような気がする。

ご存知の通り韓国の文章はハングルで書かれるが、漢字も適宜混ぜて書かれることもある。その混ぜ具合にルールはないし、全く漢字が使われない文章も多い。高等学校で一定の漢字を教えると言う事だが、一般に、若者程、漢字は苦手ようだ。しかし、近年、大手企業の入社試験では漢字のテストも前向きにやっているという。日本や中国とのビジネスを視野に入れての事ようだ。

このように、日中韓は漢字という共通の文字をもつ親せきのような関係の国とも言える。将来これら3国がこの点を考慮し、共通する漢字の教育に何らかの考慮をほどこしていけば、3国間の将来のコミュニケーション向上に測り知れない寄与があるであろう。2002年にはサッカーワールドカップを共催することでもあるし、日韓の交流は今後増えることはあっても減ることはないだろう。皆さんもハングル語をテレビやラジオで始めてみませんか。

近くて遠い国とも言われている韓国に、カヌーOB、OGの皆様、一度来て見ませんか。成田から2時間です。向こう3軒両隣は大切にする上でも。

カヌーでの国際交流の思い出など

清野 学（S45年卒）

二度目の寄稿要請をいただいてから、今回は絶対に書かなければとあれこれ思いを巡らせていましたが、20年以上も離れてしまうと書くことが思い浮かばずやり過ごしていました。しかし後藤会長の原稿集めや編集のご苦勞を思い、重い筆（指）をとってワープロの前に座っています。

日本も今や仕事上ではもちろんのこと、市民レベルでも国際化の時代で、若者はどんどん海外に出かけて行きますし、外国人も日常的に見かけるようになりましたが、私の現役時代（昭和40年代前半）はまだまだそのような時代ではありませんでした。今回は、その当時の私のカヌーでの国際交流体験とそれに関連した雑感をつづってみたいと思います。

昭和46年の夏休み、一連の選手権が終わった後ののんびりとできる時期だったと思います（私は現役を引退していましたが）。自由練習のため数人が艇庫前に集まっていました。そこへTシャツ短パン姿でリュックを背負った1人の外人が現れました。彼は私達に英語で話しかけてきましたが、読み書き中心の英語教育しか受けなかった我々世代に会話のできる者がいるはずもなく、カタコトと身振り手振りでやっと意志疎通ができました。彼はカナダ人のパドラーで、国ではラシーヌという町のカヌークラブに所属して活動している、日本を旅行して回っており、京大を訪ねてカヌー一部の艇庫を教えてもらって訪ねてきたというのです。ちょうど熊本先生が長期間アメリカに行かれていた時期で、向こうで先生から我部の情報がなんらかの形で届いていた可能性もあると、後で考えたこともあります、先生には確認していません。残念ながら彼の名前を覚えていません。

彼は日本でカヌーに乗りたいと思ってわざわざ我部を訪ねてくれたのでした。私達もちょうど練習するところだったので、早速一緒に乗ることにしました。彼はクラブのウェア（赤白の横じまのランニング、“Barber pole”と呼んでいるそうです）に着替えて、私とペア（ノザワ艇かヤンマ一艇）に乗ることになり、彼は後ろに座りました（写真：漕ぎ出す前）。

小松屋までロングとダッシュを行いました。彼は私にきっちりとピッチを合わせ、後ろからぐいぐい押すような力強いストロークを感じました。彼の専門はカナディアンだったと思いますが（当時京大にはカナディアン艇はありませんでした）、専門外のカヤックでもこれほど力強いのかと、外人との力の差（トレーニングの差かも？）に驚かされたことを覚えています。背丈は日本人と変わらないが胸板の分厚いがっしりした体格の持ち主でした。

流している状態から「ピッチを上げるぞ」と伝えるのに“pitch”と言う単語が通じず、いろいろ言い換えて結局通じず“Dash”と叫んでいきなりピッチを上げました。我々が使っている「ピッチ」も日本人だけに通じる英語なののでしょうか。その後正しくはどう表現するのか調べてはいません。

彼はクラブの紹介パンフレットを呉れ、なにがしかの説明をしてくれましたと思いますが覚えていません。多分最後に、「日本でカヌーに乗ることができてとてもうれしかった」と言って握手して去って行く、というシーンがあったと推測します。残っているのはおぼろげな記憶とパンフレットと写真だけです。

一昨年仕事で初めてアメリカに行きました。オンタリオ湖南岸に面した閑静な美しい町でした。11月初めで湖岸のすばらしい紅葉の黄色のトンネルを通りながら、樹々の合間から見え隠れするオンタリオ湖を眺めていると、熊本先生から何回も聞かされた“Don Dodge Regatta”の由来の話を思い出しました、「確かあの悲劇の場所はオンタリオ湖ではなかったか」と（何回も聞いているのに、間違っていたら先生ごめんなさい。どなたか訂正して下さい）。その日はどんよりとして少し風がありかなり大きな波が立っていました、Don Dodge 君が遭難したその日も途中からこのような波がでたのだらうと想像しました。琵琶湖とはスケールが違い、湖というより海と言ったほうが適切です。タクシーの運転手にたどたどしい英語で「晴れた日には対岸のカナダが見えますか」と言う馬鹿な質問に対して、“Absolutely no!”とつっけんどんな返事が帰ってきました。対岸のカナダを想像したとき、前述のカナダのカヌークラブのことを思

い出していました。これまで理由もなくそのクラブは五大湖のほとりにあるものとイメージしていたため、その時その湖はオンタリオ湖に違いないと思い込みつつありました。Don Dodge 君のことと共に何か不思議な因縁めいたものを感じていました。

帰国してすぐに、20数年前にもらったカナダのカヌークラブのパンフレットを引っ張り出して改めて詳しく読んでみました。そのクラブの正式名、所在地は次の通りで、オンタリオ湖岸ではなくモントリオールの郊外の川に面した小さな町でした。去年も同じ時期にトロントにも行きましたがモントリオールまでは足を延ばすことはできませんでした。皆さんもモントリオールの近くに行く機会があれば訪問してみてはいかがでしょうか。

Lachine Racing Canoe Club

2801 St. Joseph Blvd., Lachine, Quevec, Canada

記述（20数年前の）によると、その歴史は約77年（現時点で）に達し、地域に密着したすばらしいクラブのようです。また、オリンピックに選手を送ったり北米選手権でメダルを獲得したり、かなり強いクラブでもあるようです。

このクラブのモットーは“THROUGH THE WATERS TO FRIENDSHIP” だそうです。卒業してからずっと、余裕ができたなら楽しくカヌーがしたい、カヌーを通じて仲間を作りたい、と考えてきました。余裕は待っていても来ない、作るものだ、といわれます。決断しないと手遅れになる年齢に差しかかっています。

日本にもカナダのように、身近に気軽に参加できる地域に密着したカヌークラブが数多くできればと思います。

ファルトボートで沈したこと

島田 潔（S47年卒）

数年前、会社の部下とその妹（A子としておく）を含む4人で川下りに出かけた。場所は長瀬ライン下りで有名な埼玉県秩父の荒川。ここは前年に同期の小浦場、石田、藤堂、長谷川と下った所で、沈寸前の経験もあり、危険なポイントは外した積もりであった。私のファルトボートは2人乗りで、前に初心者のA子が乗っていた。後の2人は車で伴走していた。長瀬ライン下りの終点を過ぎて少し下った所で、大きな岩に挟まれた落差1m程度の堰が轟音とともに突如眼前に現れた。前年は、私と藤堂が上流で乗り、小浦場と長谷川がこの堰を通過している。このとき、釣り人の警告を受け、ポータージ（危険な場所を避けるため、カヌーを陸上輸送すること）したとのこと。

条件反射的にカヌーを堰の片側の岩に横付けした。一旦、岩に上陸し、取るべき道を思案した。このまま流れに突っ込めば、沈して両側の岩に激突するかも知れない。また、カヌーは折り畳み式で強度的に不安があり、真二つになる可能性もある。しかし、引き返すことも、泳いで岸へ渡ることも不可能である。我々の両側は、激しい流れがゴーゴーと音を立てて流れている。取れる道は、突っ込むしかない。その中で、一つの選択肢は空でカヌーを流し、人間は後から飛び込むというものである。カヌーが空であれば、人間の体重が作用せず、また水流による力も小さくなるため、破壊されずに済む可能性が高い。カヌーに投じた数十万円が頭をよぎった。しかし、流れに対して横向きになり、岩に引っかかった形は非常に不安定であり、A子がカヌーから降りることは不可能である。カヌーに当たる水流は激しく、今にもカヌーが流されそうになる。また、カヌーから出て人間が流れに飛び込むと、両側の岩に激突し怪我をする確率が高くなる。

このようなことを数十秒の短い間に色々考え、たどり着いた最終結論は、カヌーに乗って突っ込むことであった。カヌーを諦め、人命を優先する当然の結論であった。

結果は、カヌーの突っ込むスピードが速く、シートに腰を降ろす間もなく転覆してしまった。A子の安全を確認した上でパドルをカヌーに寄せ、岸までカヌーを押して行った（昔とった杵柄）。気がつけば1本のパドルが岩に挟まれて、川の真ん中に片側のブレードを出した状態で突き刺さっているのではないかと。再び上流から水中へダイブ。流れに身を任せながらパドルを回収した。

もう一つ紛失したものは、赤いコックピットカバーである。長瀬は峡谷が両側から迫っており、水深の深いところでは流れが非常に遅くなっている。高い位置から眺めると、薄ら赤いものが水底に見える。これも首尾良く回収できた。

さらに無くしたものがある。購入したばかりの眼鏡である。バブルの頃で5万円はしたため何とか回収したかったが、如何せん水中眼鏡なしで水中の眼鏡を見つけることは不可能であるため、断念した。

1年後、眼鏡の回収を目的に、水中眼鏡と足ひれを持って女房と長瀬を訪れた。女房には本当の目的は隠し、キャンプに誘ったのである。海水パンツにはきかえ、いざ潜らんとしたときに女房に止められ、1年に亘る壮大な眼鏡回収計画はピリオドを打った。水から安全に帰還する自信は100%、眼鏡を発見する自信は50%、女房に安全性を説得する自信は0%であった。なお、長瀬は、遊泳禁止である。

西村 光一 (S 4 7 年卒)

カヌー部を卒業して、はや4半世紀が過ぎたが、今は、草野球のピッチャーとマラソンとにスポーツの喜びを見いだしている今日この頃である。

さて、4年間のカヌーレースの中で、一番のレースをあげるとすれば、4年生の夏の関西インカレでのK君とのペア1,000mのレースであろう。K君は、1年生の時からぼくら同学年のエースであり、誇りでもあった。ぼくとペアを組ませてもらえるような人ではなかった。

4年生になり、今まで自分が考えて来たカヌーを実現するべくキャプテンになったとき、最強のペアを作るというぼくの構想に基づき、当然に彼をパートナーに選んだ。その頃には、レースで彼に勝つことこそなかったが、実力は差なくなっていた。4年目で初めてのペアでもあり、大会に向けた合宿練習では、彼がいるときは、必ずペアの練習をした。普段でもそうだが、水の上でもほとんど言葉を交わすことがなかったが、とにかく僕の作る1,000mのペース配分にあわせてくれた。

1,000mの決勝は、当時学生NO.1といわれた関学のペアとの一騎打ちになった。レーンは両サイドに分かれていたが、最後の200mまでピッタリ並んでいた。予定通り200mのラストスパートというとき、水の上ではいつも冷静なK君が大声をあげた。今までの練習で経験しなかったことである。必死のラストスパートでライバルに水をあげ、トップでゴールにすべり込んだ。練習で作り上げたペース配分を完璧に実行し得たと実感できるレースであった。ちなみに、この大会で初めて、シングルで僕はK君に勝つことが出来た。

この後、秋のインカレではペアの練習不足で、良い成績はあげられなかった。もちろんチャンピオンは関学のペアであった。

あの夏の日の思い出は今も鮮明に残っている。それにしても、K君は、ぼくとのペアのことどう思っていたのだろうか。

最後に、K君は、やはりぼくよりも早く3人の男の子の親になったが、ぼくは遅れたが4人の男の子の親になった。このレースにおいても、ぼくが最後に勝ったことになるのであろうか。

上坂 政章（S48年卒）

カヌー部 OB として登録いただいているが、実は3回生の秋に退部したので、正確に言うと中Bということになる。なぜ途中で辞めたか、振り返ってみると、専門の講義や実験棟が集中し、忙しいということもあったが、その夏、合宿中に急性肝炎（瀬田川の汚染が原因で散発的に発生するA型肝炎だったようだが）を発症し、今になって考えれば、絶対安静との診断の3日後の試合に出たのも若気の至りというか危ないことであった。しかし、当時の私にとって肝臓という臓器は強靱なもので、半年間、酒や激しい運動を絶って、静かな生活をしているうちに破壊された肝細胞が再生し、完全に元の体になった。

4回生は、早速カヌーで鍛えた体力で徹夜の卒業実験などをやりながら将来を考えたが、このまま、専門性を究め、生産企業の一員となって競争社会を生き抜いていくことに漠然とした抵抗を感じ、当時、大きな問題となりつつあった公害・環境問題こそ最重要課題である、というのは大義名分で、生活の安定や時間のゆとりを求める気持ちからも、公務員になった。ある種のモラトリアム（執行猶予）ということだったかも知れない。

そして、20数年が経つ中で、マイホームや子供の成長を横にらみにしながら、可でも不可でもない現状に安住する気持ちと、何らかの実現、達成願望が複雑に混在しているのが今の自分である。即ち”惑”でも”不惑”でもない中年男の心境といったところ。

そんな中で、あらためて、カヌーと現在の自分とのかかわりを考えてみる機会として、この原稿を書いている。

大学時代にカヌーをやっていたことの意味を自分なりに整理してみると、

- ① 受験勉強という知的訓練から肉体的訓練への切替え
- ② 競技成果という、新たな次の目標の獲得
- ③ 新たな人間集団、友人との出会い
- ④ 快適な自然とのふれあいという本能的欲求

人によっては、ほかにもあるかも知れないし、これらの内訳は千差万別であろう。

私の場合は、

①については、当時、使用（入部）前、使用（〃）後で訓練の成果は目を見張るものがあり、アメリカンフットボールの選手のように肩にパットでも入れているのだろうとよく言われたものである。また、理屈よりも実践を重んじるというか、直感的、或は感性的な思考へシフトしていったように思う。今は、かつてのようにな筋肉の隆盛はないが、私の肉体と精神のフレームのもとになっていることは確かである。

②については、受験という成績（結果）至上主義を単にスポーツに置き換えることに抵抗を感じていたが、速いということ、勝ということは素晴らしいことであり、また、いかに効率的に成果（スピード）を上げるかという点では、内心、速さ/練習量の比が大きければ大きい程よいなどと考えて（練習をさぼる理由にならないが）いたが、これは、仕事にも通じることで、特に行政改革が叫ばれている昨今、行政効果（住民福祉等）/コスト（予算・人員等）を如何に高めるかというのが我々公務員の課題である。

③については、球技が苦手な自分にとって、カヌーという真新しいスポーツにもとに集まる集団は、極めて魅力的であり、教養部構内の老朽化した体育館前での昼休みの陸トレ風景の第一印象は今でも頭に焼きついている。新人歓迎コンパでは、先輩、同輩の天真爛漫さ、屈託のない雰囲気嬉しくなって、ウィスキー（サントリーレッド）の一気飲みの結果大暴れしてしまったことを覚えている。個性豊かなメンバーが揃っていて、あれほど、伸び伸びとつきあえたことはなかった。

④については、その後も、アウトドア指向は変わらず、卒業後5シーズンの信州でスキーの1級をとった。（その後の進歩はないが、いまでも神鍋山やハチ北へ行っている。ふと回りをみると若者ばかりであるが。）釣りも瀬戸内海、日本海、溪流と一時はよく行ったが面倒くさくなって今はあまり行っていない。神戸に住んでいるので六甲山など身近に自然が豊富にあり、山登りやマウンテンバイクのコースもまだまだ開拓の余地がある。（幸いなことに神戸の西北のはずれなので、“大震災”では、職場は別と

して自宅の被害は軽微であった。)

なお、カヌーであるが、就職後6年のころ、宿敵？関学の前にある家内の実家に住んでいた時、「暮らしの手帳」に作り方が書いてあるからという家内の提案を受け入れて、手作りで折り畳みのファルトボートを造り、西宮のヨットハーバーなどで乗っていたが、いちいち組立がやっかいなので今は物置に入ったままである。兵庫県では、青少年にウォータースポーツの普及を図るため、芦屋の海洋体育館と城崎の円山川公苑ではカヌーを借りることが出来、息子を連れて何回か行ったことがある。神戸にはあまり大きな川はないが、播磨まで足を伸ばすと、加古川や大小のため池があり、行政の後援でカヌー教室や大会が開かれており、先日、エスキモーターンに挑戦しようと受講したら、講師は学生当時、同志社大学の二宮順子氏（兵庫県カヌー連盟理事長）であった。

今後、もっとスケールの大きい海外を舞台にしたアウトドアを夢見ているが、かなうかどうか。

また、カヌーを愛する気持ちは、音楽では自然にジャズのとりことなり、学生時代からLP、カセット、CDを好んで聴いている。

仕事の上でも、縦割りを打破していかに総合的な地方分権を確立していくかが大きな課題となっている中で、川や海の水質汚濁の防止からさらに水量、私物、親水性、水文化等を含めた総合的な水環境の保全と創造への展開が求められているところであり、水上からの視点というものを大切にしたいと思っている。

以上、河奴への投稿依頼を機会に（しばらく回ってこないと思って）、思いつくことを羅列してみた。何よりもカヌー時代のことを考えているだけで元気が出てくるのは嬉しいことです。

鳥取からの報告（その1） 段ボールカヌー大会奮戦記

森 正雄（S49年卒）

『段ボールで作ったカヌーなんて水に浮かぶかな？』
『レースをしてゴールまでもつだらうか……？』
時は95年初夏。場所は、鳥取大学工学部のとある研究室。その部屋の主は、その年の4月に新たに赴任してきた福井君である。数日前に地元紙『日本海新聞』に掲載された記事は以下のものであった。

”湖山（こやま）池手作りカヌー大会出場者大募集！賞金総額100万円”
一般の部（100mタイムレース）

- （1）段ボールの使用量・船の大きさは特に制限しない。
- （2）特殊段ボール・紙管・ボール紙（厚紙）・発泡スチロール・木材・金属等の使用は一切禁止。
- （3）テープは紙製・布製・ビニール製の使用はよいが、全面又は広範囲に貼り付ける等、接合目的外（強度向上目的など）の使用は禁止。
※貼付面は表面積の約10%以下を目安とする。
- （4）接着剤（ボンドetc）使用は禁止する。
- （5）塗装はペンキ・ラッカー等、防水だけを目的とした塗装でなければならない。

エポキシ系等の硬化塗装で強度向上を目的とした塗装は禁止。

（船体検査の際に細いピアノ線を船体に差し込み、挿入出来ない物は不可）

.....

『面白そうやから参加しようや』

福井君と私の意見が一致し、私が艇の設計・製作、福井君が漕ぎ手という役割分担で交渉成立。二人の挑戦が始まった。

私がIBMの鳥取営業所に所長として赴任したのは、その約1年半前の

94年1月だった。単身鳥取駅に降り立った時、町は白く雪化粧をしていた。かつて、大伴家持が都から因幡（いなば）の国の国司として当地に赴任した時（西暦758年）も白い雪に覆われていたらしく、家持は万葉集最後の歌に、

新しき年の始めの初春の 今日降る雪のいや重げ吉事（よごと）
とこの国の正月の風景を詠んでいる。

鳥取県は人口61万5千人、面積3,500平方キロメートル。県内総生産が2兆円弱（全国比：0.4%）という小県である。衆議院の小選挙区も2つしかない。とりたてて大きな産業もない鳥取県であるが、鳥取県庁が我がIBM社の大型汎用機のユーザーである関係から、県庁を中心に営業活動を行っていた。

95年の冬のある日のこと。鳥取大学工学部のO教授をコール、雑談中に福井君の名前が出てきた。そのO教授は京大工学部航空工学科出身で、福井君の先輩にあたる。先生の話によると、まだ正式決定ではないが福井君がこの春（95年4月）NTTを退社して鳥大教授として赴任予定とのこと。そして4月福井君は単身鳥取に赴任してきたのである。

こんな経緯から、鳥取大学にはIBM機があまり導入されていないのにも拘わらず、冒頭の会話の時のように工学部の福井研究室に表敬訪問する日が多くなった。

さてカヌー大会に向けての段ボールカヌーの製作である。まず設計目標を二人で決めた。シングルで、多少の雨・風にも耐えられるよう耐久性に優れていること。特にストレッチャー部分は足を突っ張っても破れないよう補強されていること。

これを基に私が設計図を作った。艇長4m、中央部の幅65cmに決めた。設計変更を3度繰り返し、10分の1模型を3度も作り最終モデルが完成した。

段ボールは、大会協賛の段ボール会社から調達するしくみになっている。一枚の大きさは2 m x 1.8 mで、400円也である。とりあえず6枚購入することにしたものの、自家用車には乗り切らず、結局取引先の運送会社に頼み運んでもらった。自宅まで約2 Kmで、運送費3,000円。高い買い物であった。

製作はレースの2週間前より自宅のガレージで行った。途中、鳥取の夏の最大のイベントである『しゃんしゃん祭り』への参加もあり、結構忙しい夏になった。休暇をとって自宅ガレージでカヌーを作っていると、近所の人達、特に子供達が好奇の眼差しで近寄ってきた。

ともあれカヌーは完成し、レース当日になった。我々のチームはエントリーNo. 1。一般とジュニアおよびパフォーマンスの部あわせて100組近いチームがエントリーしている中、第一レースの出艇であった。地元のテレビ局のインタビューを受けた後、第一レース4艇がスタート。カヌーになど乗ったことのない人、パドルを握ったことのない人、あるいは実物のカヌーを見たこともない人が大部分である。

レースの行われた湖山（こやま）池は鳥取大学のすぐ西に位置し、日本最大の池といわれている。池と湖の違いは未だにわからないが、とにかく池では最大だそうである。さて、レースが始まってみれば、スタート直後に沈したり、迷走する艇が続出する中、福井君の力漕によりわれわれの艇はぶっちぎりのタイムで優勝することができ、優勝賞金を手にした。

『バンザイ～』

この大会の様子は、後日地元のローカルテレビ局である山陰中央テレビの一時間の特番として放映されたのである。

鳥取からの報告（その2） 鳥取大学での1年半

福井 茂寿（S49年卒）

95年3月末に、それまで18年間勤めていたNTTの研究所を退職し、鳥取大学工学部に奉職。すでに1年半が経過しました。単身赴任のため、平均して月1回程度埼玉県狭山市の自宅へ帰る二重生活をしています。その鳥取大学では、工学部に新設された応用数理工学科の教授として、講義の準備・研究の立ち上げから、新しい学科のコンセプトやルール作りなどに至るまで、中小企業の社長よろしく忙しい日々を送っています。

鳥取は、大阪出身の私にとっては山陰の観光地としては幾分馴染みの地ですが（鳥取砂丘や二十世紀梨は有名）、それでも最近ではやはり気質や風土の違いなどが目につきはじめ、多分に閉鎖的な気質や非能率さにいらだちを覚えるとともに、それまで居た東京近郊の様な喧騒の大都会にない緩やかさや暖かみを感じています。さらには、大学という特有の場、すなわち大学の先生は一国一城の主、などという如何にも自由でやり甲斐のある、しかして何とも融通の利かないスタイルに戸惑うこともあります。

ところで、鳥取とカヌー部の仲間には妙な縁があるので、ご報告させていただきます。

森 正雄君のこと：この河奴の別原稿にもあるように、私と同期で工・建築だった森 正雄君（カヌー部は途中で止めてしまいましたが）が、私が赴任する1年余り前から日本IBMの鳥取営業所の所長として家族とともに居ます。鳥取に来る以前からアウトドアーのカヌーを楽しんでいたようで、しきりに私にアウトドアーのカヌーを勧めてくれ、夏には彼のカヌーに乗せてもらっています。また95年8月末には、大学のすぐ横の池で、「ダンボール手作りカヌー大会」というのが開催され、彼は建築出身の才能を発揮してダンボールカヌー作り、私は過去の栄光をもう一度と20年ぶり位で漕ぎ手に回り、みごと一等で多額の賞金を手にしました（その年は、非常にレベルが低かった！？）。彼は本番で漕げなかったのが残念だったらしく、96年の大会ではペアーのダンボールカヌーをと計画し、数

々の製作ルール上の制限をものともせず2人乗りを作り上げ、本番では私と二人の少々重量級のペアで完漕しました。結果は2位でしたが、一応の目的は達成です。森君は、その他にもログハウス作りと週末のアウトドア生活、その他のスポーツなど、多方面に楽しみを持っており羨ましい限りです。（95年年末の甲子園ボウル（京大が全国制覇）には、私と草薙君（下記参照）とともに観戦。今年（96年）も観戦を計画中。）

また仕事柄、大学にもよく出入りしていますし、公私ともに色々教えてください。

なお、同期の堀内博之君（旧姓：藤井君）はIBM高知におり、森君は社内の研修などで時々顔を会わせたり、連絡している様です。

草薙 徹君のこと：草薙君は、同じく私と同期で、農学部とカヌー部が無事卒業し、現在大阪市消防局に勤務しています。その御長男（渉君）が現在大学2年生で、なんと鳥取大学工学部で勉学中なのです（学科は違いますが、知能情報工学科というすぐ近くの学科です）。渉君は、何度か私の研究室を訪ねて来ましたが、おやじさんに似合わず現代的な感じの青年で驚きました。奥さんの実家が米子かどこかのようで、鳥取県内に親戚が居たりでこちらを選んだのかも知れません。親である草薙君は、時々はおさんとともに渉君の様子を見るために鳥取に来ており、一度は私も渉君のマンションに寄せて頂き旧交を暖めました。そのうち渉君が私の講義を聞いたりするかも知れず、何とも不思議な気分です。

大学を卒業してすでに20余年が過ぎ、生活に少しは余裕がでてきたのか、はたまた先が見えてきたのか、古くからの友達が懐かしく思えます。機会を見つけては、同期全員（奥野和夫君（農水省勤務）、堀内、草薙、森の各君と私）でできれば家族連れで集まりたいものだと話してはいますが、まだまだ部分的にしか実現してないのが残念です。（96年の那珂川のカヌーツアーには、森君と私が鳥取から、奥野君が鎌倉から参加しました。）

那珂川カヌーツアー報告

山崎 裕司（S50年卒）

12月6日の東京忘年会を、次の日の土曜日と間違えて参加しなかった後藤さん（S40）から、「忘年会は大変失礼しました。何故か（ボケか）土曜日と思い込んでいて、自宅で『土曜日の深酒』に備えて休養していました。」とのファックスが届きました。「今年的那珂川のカヌーツアーを紹介する原稿がありません。誰か書いてくれる人はいないでしょうか？」との用件。12月18日（水）のこと。期限は「今週の土曜日」。

書いてくれる人を探すのと、自分でやるのとどちらが楽か（大変か）考えながら大西（S62）へ電話しました。大先輩からの仕事、これはもう私も大先輩の顔をして……。でも大西君は出張でした。行き場のない仕事、この年末に、ついでに別件の飛び込みも入ったこの日に、何で私が、せめて1週間くらいは余裕があれば、どうせ去年から分かっていたスケジュールのはずなのに、忘年会も出なかったくせに、何が「大変失礼しました」なのだろう、本当にもう……。

ということで本題に入ります。記憶の間違い、誤字、脱字、何もかもご了承くださいたく、また簡略に。

昨年（著者はH9年に読む読者の立場で：後藤）5月11日そして12日、島田さんの呼びかけにより那珂川の川下りへ。参加メンバーは最長老が薩摩さん（S46）、続いて同期会を兼ねたS47組が島田、寺田、石田、籐堂各氏、S49組が奥野、福井、森各氏。S50卒業予定組は全員で2名、早川（S54卒）山崎（S51卒）、その2名が参加予定でしたが、何故か早川氏は音信不通のまま参加せず。若手は大西、六車、綿谷、津田他（記憶があいまいです）と、一部の方の家族の皆さん。総勢は20人くらい。

1日目の11日はそれぞれの都合に合わせて、パラパラと集まり、夜に

なるにつれ数が増え、バーベキューの場はジンワリと盛り上がって、夜は深まり、そして気が遠くなって・・・。

次の朝、さらに人数を加えながら車で上流へ。那珂は川下りのメッカか、他にも何グループものツーリングのグループ。これがまた皆さんカッコ良く、我々の方が本物に近いはずなのに何故か小ぎたなくて、「やっぱり京大カヌー部」の存在感たっぷり。

全体に初級コースなのか、ひやっとしたのは1回こっきり。出っ張った岩に吸い寄せられるように近づいた時くらい。水量が少ないためか、一番つらかったのは浅瀬に乗り上げた時。水が冷たい。船を押しながら深みを探す。

入れ変わりたち変わり船に乗り、全体で十数Kmは下ったのだろうか。まだまだ豊かな自然を味わいながら、ゆったりと川を下る。ときどき日が差すくもり空を見上げ、時間とともに適度な疲労と、そして日常のストレスが溶けていくような気分。同時に過去の、あの何の意味もなくカヌーを漕いでいた学生時代の記憶が、少しずつ少しずつ戻ってくる。

ま、そんな何となく良い2日間でした。で薩摩さんからは「忘年会には出ないけれどツーリングは来年も参加」、松原君からは「あまりに遠くなって（盛岡？）忘年会には出ないけれど、山登りできたえているから来年はツーリングは参加」。これは、も、今年もやるしかない。今年は何万十川か、それともビワ湖か。そしてまだ早川君からは音信がない。

つくばマラソン

古川 潤一（S51年卒）

昨11月24日、3回目のつくばマラソンを走った（ということは、つくばに移って早4年半が過ぎた、ということに改めて思い至る）。これでフルマラソン参加も8回、自慢じゃないがあの有森祐子の6回を凌駕、走行時間では倍以上にも上る。

学生時代走るのが特に好きだったわけではない（むしろ嫌いだった？）私が、何故走り出したかという、アメリカ赴任中に増えに増えた体重を落とそうと思い立ったためと、つくばには何も無いからである。そんな私が、「フルマラソンを走る」というと一かつての私がそうであったようにタイムとかに関係なくそれだけで感心されるので面映ゆい面がある。

そんなジョギングを始めたばかりの頃、「私今度のつくばマラソンで走るんです。」という人に会い、当時42.195kmも走れるのは極一部の専門家だけだと思っていた私は痛く感心し、すぐそばでもあったので筑波大学のスタート地点まで見学に行った。するとそこには太鼓腹のオッサンや胡麻塩頭のオバハンやらが並んでいるではないか！若い連中の中にもオチャラケがいる。「こんな連中に走れるのなら、オレに出来ないはずがない」と確信し、早速翌年の大会に参加すべく練習を開始したのであった。

いきなり42kmも走れるはずがないから徐々に距離を伸ばしていき、それにつれて、様子見のために参加するレースも5km、10km、10マイルそしてハーフと段々長くしていった。10マイルレースくらいになると、つくばマラソンのスタートで見たような、がに股で無茶苦茶なフォームのオッサンや、今にも倒れるのではないかと心配になるような荒い息づかいのオバハンにいつも簡単に追い抜かれ、その後彼らを再び見ることは無かった、という屈辱を早くも味わった。

ましてや42.195kmの本番ではもっと悲惨な目にもあった。周りに引っ張

られたり、体調が良いと錯覚したりして前半とばしすぎると、後半全く前へ進まなくなる。本当に脚が棒のようになるのである。30kmを過ぎた頃から足にマメが出来始め、「庇うと寧ろ良くない」というので我慢して走り続けるとますますマメが大きくなっていくのがわかる。そして遂にはゴールまでトボトボと歩く羽目になるのである。ゴール後はビッコをひきながらしか歩けないし、本当にEXHAUSTしたという感じでもうコリゴリ。活性酸素がどうのという最新の医学説もあるし、「何が面白くてこんな苦しい思いをしているのだろう、もうやめた」とその時は思うのだが、いつの間にかまた走り出している。「ランナーズ・ハイ」と云われる走行中の一種高揚した快感が、麻薬のように止められなくしているのかもしれない。一度止めると今度再開するのが辛く、それを恐れているところもあるだろう。

走ってみて初めてわかったことに、「量の問題が質の問題となる」というのがある。私が4時間かけて走るのと、テレビなんかで見るような選手が2時間そこそこで走るのとでは、異なった状況が現出するのである。冬場のレースでは、我々レベルだと2時間くらいで出る汗も少なくなり、3時間もするとその出た汗が冷えてきて、寒くて走れなくなる。だからランニングに短パンなど以ての外で、暖かい格好で臨まねばならないのである。また、4時間も走っていると血糖値が下がり走れなくなる、いわゆるガス欠症状を起こすことがある。そのため一別に走ってなくても食後4時間もすれば結構腹も減ってくるんだからー2、3日前から「カーボローディング」と称して澱粉ばかり大食いし、当日はゲップをしながらスタート地点に立つのである。これは元来の目的であるはずの「減量」と相反するもので本末転倒も甚だしい。

最近記録も伸びないし、同じ所ばかり走るのにも飽きてきて、マンネリ感は否めない。そこで、昔は馬鹿にしていたホノルルマラソンーあんな暑い所で、しかも芋を洗うような人出（それも日本人ばかり）の中で、わざわざ大金をかけて行くなんてーにでも参加しようかななどとも思いはじめています。

木之内 秀彦（S 5 6 年卒）

OB会長の後藤先輩よりこれまで再三の執筆依頼があったにもかかわらず、ことごとく握り潰して、不義理を重ねてきた。（後藤先輩、ご迷惑をおかけしたことを、この場を借りまして深くお詫び申し上げます。「朝日新聞」夕刊の連載エッセーは興味深く拝読しました。）今回は「満を持して」というわけでもないが、遅ればせながら、不義理の者にも暖かく声をかけ続けてくれた先輩のご苦勞に報いたい。

とはいうものの、書くネタが実はないのが悩みの種である。近況をまとめるだけで済ますという奥の手もあるが、なにせ小生「貧乏ひまなし」を地でいく忙しいだけを取り柄の毎日なので、とてもそれを書く気など沸かない。というわけで、OB諸兄はどんなことを書いてるのかな、と過去の「河奴」をパラパラめくってみると、面白いことに気がついた。それは、私のカヌー部時代、現役仲間の中でどう見てもカヌーにそれほど熱心とは思えなかったような元部員「ですら」、社会人になって以後もカヌーを楽しんでいるとか、やりたいが機会がなくてまことに残念、といったそれぞれのカヌーへの深い思い入れや当時の楽しかった経験を綴る文を寄せているいることにある。そういうことを書く場なのだから当然といえば当然なのだろうが、ともあれ「あいつが？」と思うようなかつての部員仲間がカヌーに今なお寄せている心情を知って正直驚き、また嬉しかった。私じしん、機会と場所とお金があればカヌーを続けたい気持ちは今でもある。しかし悲しいことにこの3つのいずれも無い。3番目のものが特にない。カヌーどころか、そもそもスポーツらしきものにとんと無縁の不健康な毎日が続いている。手軽にジョギングでもと思った時期もあったが、退屈すぎるのですぐやめた。カヌーも一見単調ではあるが、OB諸兄なら誰でも知っての通り、夏合宿の早朝に静かな湖面をゆっくりと漕ぎだしていく時のあの爽快感など、陸上をチンタラ暑苦しく走るジョギングからは望むべくもない醍醐味がカヌーにはあった。思えば学生時代、金もなければ人生の

見通しもなく、ついでに言えば「女」も無く、あるのは「時間」と「頭を
からっぽにして屈託なく没頭できるカヌー」だけだったような気がする。
屈託が多すぎる今の自分から振り返れば、無心に屈託なく過ごせたカヌー
部の4年間は、これまでの生活の中で最も充実して楽しい期間だったのか
もしれない。いつでもどこでも誰でも気軽に楽しめるというスポーツでは
ないだけに、余計に貴重な体験だったと懐かしむ気持ちも沸くのだろう。
書類やらメモやら請求書やらがわんさと積もった仕事机を前にぼんやりと
そんなことを思った。最近では安定のよいツーリングカヌーを楽しむ者が
全国に増えているという。カヌー教室も各地で盛んらしい。結構なことな
のだろうが、生来の性格の悪さなのだろうか、テレビでそうした報道をみ
るとつい「ケッ、あんなままごとみたいなのは本当のカヌーじゃない」と
悪態をつき、そんな「ままごと」さえ楽しむ余裕のないわが身の不遇を恨
んで、ビールのピッチがますます上がる。どうもこの様子では不健康な生
活と性格から当分ぬけられそうにない。

近 況

佐藤 昭彦（S 5 9 年卒）

皆様大変ご無沙汰しておりますが、お元気ですか。「河奴」は学生時代を懐かしく思い出しながら毎回楽しく読ませて頂いております。確かOB 1年の時に寄稿したのをおぼろげに覚えておるのですが、それ以来サボってご無沙汰しており申し訳ありません。今回は折角ですので近況などをご報告したいと思います。

私は会社の関係でニューヨークで生活し始めて4年半経ちました。ニューヨークは日本人の数も多く日本飯屋、ヤオハン等の食料品店、本屋などもたくさんあるため、おそらく他のどの都市よりも日本人が暮らし易い都市の一つであろうかと思われます。しかし、何ヶ月経っても家に届かない配送物や、間違いの多いカード請求、全くウィンカーを出さずに車線変更する車などには慣れましたが、依然としてコミュニケーションする際伝えにくい、聞き取りにくい（もっと端的に言うとその能力が足りない）というフラストレーションを感じながら毎日の生活を送っております。

気候は俗に春、秋がないと言われるように1年を通じた寒暖の変化は激しいのですが、日本のように四季折々の自然と言った風情はあまりありません。冬の寒さと長さは格別で、10月から5月まで半年以上コートを手放せない年もあります。又、郊外に住んでいる場合には自宅前の雪かきが課されるため、一汗かいてから出勤という事もままあります。（後でやろうと放っておくと雪が凍ってしまい、片づけるのに数倍のエネルギーがかかる）

さて話が変わりますがカヌー部を卒業してから十数年、今はカヌーはもちろんのこと体を動かすことも全く縁遠い生活になってしまいました。たまにパドルの代わりにクラブを握る位なものですが、これとてもアメリカではカートで回るコースがほとんどなため勝負のかかったパットの時に心拍数がちょっと上がる程度で、到底まともな運動をしているとは言えませ

ん。熊本先生が昔「人間は1ヶ月に一度でいいから脈拍を通常の倍以上になる運動をしなければいかん」という主旨のことを仰ったのを覚えておりますが、今では年に何回あるかなしかという状況でしょうか。ただ、ハドソン川沿いを走る通勤列車の中から早朝のエイトの練習風景などが目に入ってくると、あの長くひたすら暑かった瀬田の夏や周航で行った琵琶湖の景色などが言いようのない懐かしさとともに思い起こされます。そして現役諸君のような颯爽としたパドルさばきは無理としても、回りの景色を楽しむ余裕を持ってもう一度漕いでみたいと思うわけあります。子供もそれなりに大きくなりましたし、そう遠くない将来に帰国した際には是非とも家族でカヌーをやりたいと思いながら、厳しいニューヨークの冬を過ごす毎日です。

（るん）
おー又お今、平幾十るやアJ業卒き諸一スやなせまでは変な話アち
オ。オJまのまJア。オJ諸主の影響>全まうこそ依體を料うこの入さ
衣じ入てまアうオ。オJアのまお遊る親までマコりオ升のハヤハコま
心コ割のイヤハス。オJの貴種オオがらふうオオスーにる回アイーオオア
オオス言おらるハアJき健康がまうオ奥陸、ア奥野るオ土う。オJオ奥陸

私が上海に来て1年になろうとしています。最初の頃は、カヌーをこぐにも水は汚いし（日本にいたときは運動不足解消のため十数年ぶりに子供と始めたところでした）、スキーが出来るような山は日本より遠くにあるし、見てまわるような名所旧跡は殆どないし、言葉は通じないしで休日は退屈な時間をすごしていました。しかし、住めば都とはよく言っもので「なればなんとでもなるもんだ！」が現在の実感です。

今回は紙面をかりて上海を簡単に紹介してみたいと思います。

まず上海に来た外国人が驚くのは交通ルールです。上海空港に降り立って市内へ向かうタクシーに乗ると5, 60キロで車が走る道路の真ん中に人が平気で立っているのに驚きます。横断する人がいても車は絶対にとっまたり、スピードを落としたりしません。ですから、道を横断する人は1車線でも車が来ないとその車線を渡り次の車線の車が行き過ぎるのを待つのです。そういう訳で道に立っている人の間を縫うようにタクシーは走るのです。これでよく事故が起こらないものだと思います。みなさんがもし上海の街を歩くことがあれば車は絶対に止まってくれない事を頭にいれて歩くことをお勧めいたします。

次に驚くのは人の多さです。上海は人口1300万人を越す中国最大級の国際都市です。海外からの投資が殺到し、日本人を始め、外国人の数がどんどん増加して来ています。また、北京とともに中国の数少ないゲートウェイ都市でかなりの数の観光客が押し寄せてきます。もちろん中国国内からも仕事を求めて多くの人達が集まって来ていますので、登録された人口の数倍の人が住んでいるのではないかとのことです。南京路、淮海路といった繁華街を歩く時は行列に並んでいるかのような錯覚に陥るほどです。その次に目につくのは林立する高層ビルの多さです。中国を古いイメージで考えるのか大間違いで、近年の開放政策のおかげで前述の通り外国資本（香港が50%）が殺到し、現在、高層ビルの建設ラッシュです。私の住

(平平182) 星 山小

小西 俊 (S60年卒)

僕たちは琵琶湖でカヌーを漕ぎました。来る日も来る日も漕ぎました。

琵琶湖を滑るカヌーを見て、「ゴキブリが泳いでいるみたい」、と言った人もいます。人々から罵られながらも、僕たちはカヌーを漕ぎ続けました。

遊覧船から声援を受けるときは、うれしいです。でも、僕たちはしばしば遊覧船の送り出す波によって転覆させられました。波間に漂う僕たちを、船上の人々は指をさして笑っています。いくら人々に笑われても、僕たちはカヌーを漕ぎ続けました。

瀬田の唐橋をくぐるときは気分がいいです。しばしの休憩にバトルから手を離し、琵琶湖の水をすくって飲みます。橋の上では観光の人々が珍しそうに僕たちをのぞき込んでいます。なかにはゴミを投げ捨てる人もいます。たとえゴミを投げられようとも、それでもやっぱり僕たちはカヌーを漕ぎ続けました。

雪の日も風の日も僕たちはカヌーを漕ぎました。毎日毎日漕ぎました。試合に勝つため？己を鍛えるため？何のためだかわかりません。「そこに琵琶湖があるからや」と言った後輩に「あほか」とゆうてやりました。

以上は数年前、社内報に載せた文章です。筆の勢いで多少フィクションが入っておりますが、大体こんな感じではなかったでしょうか。ちなみに私はそれほど練習熱心ではなく、いえ、決して不真面目だったわけではないのですが、漕ぐのが極端に遅くて、当時の福岡主将をはじめ皆さんに多大な迷惑をおかけしました。かさねまして福岡さんには、大文字焼きの日の「黒潮丸事件」のことを、ここに紙面をお借りしてお詫び申し上げます。

ロサンゼルスオリンピックカヌー競技開催地訪問記

(卒年002) 著 西小

小山 泰弘 (S 6 1 年卒)

いまから3年前の1993年12月、私たち家族3人はアメリカ西海岸のパサディナという街にいた。1年間の海外勤務の機会を得て、10月からNASAのジェット推進研究所での滞在を開始していたのである。そんな折り、自宅に届いた郵便物を送ってもらうようお願いしてあった第1便がパサディナのアパートに届いた。そのなかにあったのが、カヌー部入部以来はじめていただいたこの河奴の原稿依頼だった。

そこに書かれていた原稿の締切はもうとくに過ぎていた。事情を説明して今年は免除にしてもらおうかとも考えたが、とにかく間に合わないまでもどんなことを書けばいいかということは考えておこうと考えをめぐらせることにした。そのときふと思い当たったのが、1984年に行われたロスアンゼルスオリンピックである。『ロサンゼルスオリンピックが開かれた場所に行って、そのことを書いて河奴の原稿にしよう』。パサディナは、ロサンゼルスから車で30分くらいの郊外にあり、それまでにも週末に市内にあるコロシアム周辺の公園に遊びに行ったことがあったので、とっさにそんなことが頭に浮かんたのかもしれない。

さて、みなさんはロサンゼルスオリンピックでカヌー競技がどこで行われたか覚えているだろうか？1984年といえば、私は京大カヌー部3回生。たしか1回生から2回生になる春合宿のあと、埼玉県の戸田漕艇場でオリンピック派遣候補選手の選考会が行われ、京大カヌー部からは当時の犬賀主将、浅井さん、今村さん、豊田さんの4人の4回生と、2回生の私が1人参加したように覚えている。結果は、犬賀さんと初めてペアを組んで、1000mK-2で堂々の決勝5位。ただ、そのときに6位の艇があったかどうかの記憶は定かではない。瀬田の漕艇場とは大違いのべたなぎコースで、しかも向かい風。漕いでも漕いでもゴールが近づいてこなかったような印象だけが残っている。でもとにかくオリンピックの出場をあと少しの順位で逃したことは、いまでもなにかにつけての自慢の種となっている。ということもあってロサンゼルスオリンピックはまんざら全く関係

がない仲ではないのである。

思い立った翌日、夕方仕事を終えてからパサディナ市立図書館にオリンピックの開催地がどこだったのかを調べに向かった。当時の記録写真集を調べるうちに、ようやくカヌーとボートがカシタス湖（Lake Casitas）というところで行われたことを突き止めることができた。地図で調べると、ロサンゼルスから西に約200km。想像していたよりもずいぶん遠いが、それでもフリーウェイで飛ばせば2時間でいけると見当をつけて、次の週末にドライブするという心に決めてアパートに戻った。

クリスマスイブの12月24日、フォードのテンポを飛ばして一路カシタス湖へと向かった。途中の道はほとんどフリーウェイ。最後は田舎道になってスピードは出せなくなったが、予定通りほぼ2時間で到着した。舗装のない駐車場に車をとめて湖の方へと出てみると、湖面には何艇かの手漕ぎボートやエンジン付きのボートが浮かんでいた。そこには釣りをする人にボートを貸したり餌を売ったりしている小屋があり、その小屋の前の栈橋にいくつかのボートがくくりつけられている。相模湖のような立派な艇庫があったり、カヌー競技で使われたカヌーが置いてあるのではという予想はあっさりと裏切られてしまった。カヌーがあれば、それを借りてかつてのコースを漕いでみるというのを思い浮かべていたのだが、小屋の人に聞いてもカヌーはないとのこと。しょうがないので10馬力くらいの小さなエンジン付きのボートを借りることにした。ついでに小屋の人にカヌーのコースがどこだったかを聞いてみたが、さっぱりわからない様子。どうやらカヌーの試合が行われたのはそのオリンピックのとき限りで、それ以降はまったく行われていないようであった。

少しがっかりしながらも、気を取りなおして、借りたボートに持ってきた弁当を手に乗り込んで栈橋をけり出した。とにかく、まずは湖面に出てカヌー競技のコースの片鱗でも残っていないか探しながら湖上を散策することにした。湖はダムでできた人造湖で、真ん中に島が一つ。1000mくらいの直線コースは難なくとれるくらいの広さがある。周辺の一部はピクニックができるような公園になっていて、冬でなければのんびりできて気持ちよさそうな感じだが、その日はさすがに寒く、いる人は釣り人ばかり。周囲に見える建物はさっきの小屋くらいのもので、コースを示す目印

も見つからない。ボートで湖を一周してもなにもなかったの、あきらめてエンジンをとめてぷかぷかと浮かびながら、弁当を食べたり暖かい日差しの中かで昼寝をしたりしてそのあとの時間を過ごした。カヌーのコースがどこだったのかを知ることができなかったのはちょっと残念だったが、ボートの上で食べた弁当と、そのあとの昼寝の気分は最高だった。

ひとしきりのんびりとした時間を過ごしたあと、岸に戻って、車に乗り込んで帰ろうとしたとき、なんとなくそのままでは去り難く、ふと思いたってボートから見えたピクニックによさそうな芝生の丘を見ておこうと車をそちらへと走らせた。そこはやはりきれいに整備された公園になっていて、ベンチやバーベキューコンロが置いてあり、そのなかに混じってオリンピックの開催地であることを示す看板がぼつんと1つたっていた。やはりここがオリンピックの会場だったのだ！！なんだかうれしくなって周辺を探したが、あるのはその看板と、その近くに仮設電話をつなげるようにした短い電柱のようなものが残っているだけだった。それでも、そこがたぶんゴール地点だったのだろうと想像するには十分であった。そこはなだらかな芝生の広場で、そこに観客席がつくられたり、カヌーが並べられていたりしたのに違いない。いったんは完全にあきらめていただけに、ほんの少しでもそこでオリンピックが行われたことを示すものが残っていたことに感激をおぼえ、充実した気分で家路につくことができたのであった。

パサディナのアパートに戻ったあと、会長の後藤さんに電話をかけた。その電話でアメリカにいることと、河奴の原稿の件の手紙をつい最近見たことを説明して、まだ原稿が間に合うかどうかをたずねようと思ったのである。ところが、その年の河奴は残念ながらその電話の日に印刷が完成したところだとの返事。というわけで、この話は今年また河奴の原稿の手紙をいただくまで書く機会をすっかり失ってしまっていた。ロサンゼルスに出張などで行かれる方で、もしまる1日休みの日があって、どこにも観光で行きたいところがなく、なおかつ家族連れの人には、是非一度行かれてみてはいかがだろうか。私自身、もしまた行く機会があれば、ぜひファルトボートを持って行って、オリンピックに出場した気分のかつてのコースを漕いでみるというのを実現させたいといまでも思っている。

カヌー部発、天草経由、石垣島

高田 宜武（S62年卒）

去年の「河奴」で同期の萩野に心配されていたが、今春、カヌー部卒業10年目にしてようやく就職した。現在、水産庁西海区水産研究所石垣支所にて貝やカニの生態を研究している。いま思えば、石垣島に住む事になったのも、艇庫前のタニシに背番号を付けて飼っていたのが原因のひとつである。カヌー部に入って以来、水から離れた生活が出来なくなってしまったのだ。

私が、入部したときは京大カヌー部にカナディアン部門はなかった。当時のキャプテン犬賀さんに「どうせするならカナディアンがいいです」と言ったのが始まりだった。1回生の間は同志社や関学にまぜてもらって練習した。他所者なので練習で手が抜けなくてしんどかった。合宿はしんどかったが、事件も多くておもしろかった。実は、あんまり思い出せないんだけど、日誌に色々書いてあるはずだ。七夕会というのがあって、合宿中は良くマンガを読んだ。サンヨーの盆踊りにも行った。

3回になって大学の近くに下宿した。それまでは、大阪の実家から通っていた。この下宿が、よく酔っ払いの襲撃にあった。合宿中もオフの間もカヌー部にひたっていた。

4回になって、大学で今までカヌーしかしていないことに気付いた。これだけではマズいんじゃないかと思い始めた。理学部付属の天津臨湖実験所にいき「カヌー部で合宿しながら出来る卒論がありませんか？」と聞いた。それで、「タニシでも飼っとれ！」ということになった。院入試の勉強をしながらの合宿生活は頭も体もへとへとだった。運良く九大の天草臨海実験所の修士に入学できた。同期の連中はみんな京都に残るのに、一人だけ、地の果て天草に行くことになった。タニシの縁で修士の研究テーマは巻貝イシダタミガイの生態学になった。

天草は長崎に近いこともあって、昔はペーロンが盛んだっただけ。長らく跡絶えていたが、町起こしの一環で地区対抗のペーロン大会が復活した。本場長崎では、長崎水産高校のカヌー部チームが大活躍していることからわかるとうり、カナディアもペーロンも漕ぎ方の基本は同じなので

ある。私の住んでた地区はチームを出さなかったのだけれど、カヌー経験者ということで、他所のチームからスカウトされた。漁師のおっちゃん達にカナディアン漕ぎを教えることになった。おかげで、町中に知り合いが出来た。

海洋生物の研究室なので、調査等で船に乗る機会があるのだが、これが苦手である。船酔いするのだ。フェリーぐらいの大型船なら大丈夫だが、小型の漁船サイズだとすぐ酔ってしまう。カヌーで鍛えた鋭敏な平衡感覚が原因だと考えている。船が揺れても体を垂直に保つ癖が身に付いていて、やがて神経が疲れて船酔いするのだろう。統計をとって見たら面白いかもしれない。カヌー一部出身者は有意に揺れに弱いのではないだろうか。

天草に8年半いる間に、カヌー一部関係者が色々遊びに来てくれた。夏休みに保志場が来たときには、研究室の助手の先生宅に押しかけ、3人で一晩にビール27本飲み干した。その家の息子が、3人の醜態を夏休みの日記に書いて、小学校の先生に花丸をもらってきた。東川が来たときは、やはり一晩中しゃべりまくっていた。萩野の結婚式の直前に大西と横井さんが来た。そのとき食べたイワシの刺身で寄生虫のアニサキスにあたり、七転八倒した。折角きてくれたのに、あんまり案内出来ずに悪かったなあ。

長らく就職がなく、うだうだとOD生活をしていたが、一念発起して公務員試験を受けた。三十路をすぎて試験勉強をする羽目になるとは思わなかったが、何とか採用された。理学部出身者が水産研究所にはいるのはあまり普通ではない。だが、新設された石垣支所は生態学的な研究も目指しているので、ここに配属されたのだと思う。瀬田川のタニシから始まって、ついに、海の果て石垣島に来てしまった。周りの海には手付かずの研究テーマがごろごろしている。とりあえず、マングローブ域の生物調査用に研究費でカヌーを買えないかと画策中である。

という訳で、いま石垣にいる。では、何かのついでに寄ってください。歓迎します。

TAKADA, Yoshitake

Ishigaki Tropical Station

Seikai National Fisheries Research Institute

Fukai-Ota 148-446, Ishigaki, Okinawa 907-04, Japan

東野 真和（S 6 3 年卒）

冬になると、腰や首が痛い。カナディアンを漕いでいたが、筋トレをさぼったせいで背骨が曲がってしまったからだ。自分の怠慢も顧みず、「カヌーなどしなきゃよかった」と愚痴り、途中で退部したという気兼ねもあって、ずっとカヌーからは背を向けていたが、近ごろ、無性に瀬田川が懐かしい。

「熊本先生に取材しました」と後輩の科学部の記者から電話があった。「おれの事なんか忘れてたやろ」「いえ、覚えてらしたです」。また、カヌー部の先輩で同じ会社の石田裕貴夫デスクにも、「そういえば君は…」と面識がないにもかかわらず、仕事の電話の機会に声をかけてもらった。再び水の誘惑を感じているのも、そんなことが最近あったことや、警察担当という、むなしく慌ただしい仕事を2年半も続けているのが理由かもしれない。

私は愛知県警の捜査1課、3課を受け持っている。おおざっぱに言えば、人殺しや泥棒の記事を警察に情報をもらいながら書くのが仕事。こっそり教えてもらうために、朝晩、捜査員のお宅を訪ねたり、事件の関係者をあたる。ロールプレイングゲームなら、何かヒントを言ってくれるが、現実はなかなかそうはいかない。寒空のもと、家の回りをうろうろしていると、カヌーの練習を思い出す。水面をパドルで切りながら、ひたすら琵琶湖漕艇場やその下流を往復する。大正大の選手が「これは修行だ」と話しているのを雑誌で読んだことがある。まさに、今の仕事はそんな感じだ。

来年の元旦は県警に泊まるため、初漕ぎには行けないけど、先輩、後輩と会って、酒でも飲みながら語りたいと思う。面識なくても、気軽に連絡して下さい。アドレスは「rf3m-hgsn@asahi-net.or.jp」。住所等は名簿参照。

カヌー部の思い出

(卒年882) 麻紀子 復東

新井 麻紀子（旧姓若野、H1年卒）

カヌー部を卒業してもう8年もたって、年齢も30歳に近づき、あのころは“若かった”なんて思うようになりました。

「河奴」の原稿依頼が昨年末にもありましたが実家へ郵送され締め切りからずい分たって開封したため、申し訳ないのですが投稿できませんでした。

短大に入学し、小松先輩を頼り、マネージャーではなく部員としてほとんどおしかけ入部、いそろう合宿をさせていただき、大変なご迷惑をおかけしたことと思います。

たった2年間でしたが、毎日が充実していたと思います。でも今考えれば若かったなと。合宿所ではマネージャー以外男の人ばかり。露口先輩に無理に安くゆづっていただい原付で、国道1号線を京都7条から艇庫までほとんど毎日授業が終わってから走り、練習に間に合わないとすっとぼした日には白バイにスピード違反でつかまったこともあった。

エッセン係りは、短大では家政科食物学科でありながら、はっきりいって料理は部員の男性より下手。かなり好き嫌いもあったのですが、（ひじき、切り干し大根、トマトetc）合宿中練習で大変おなかがすくので食べられるようになりました。

現在私は5年勤めた会社で社内恋愛のすえ結婚し1歳8ヶ月と生後20日の2児の母。自分の時間と言えば、2人が同時に昼寝してくれている間のわずかな時しかありません。もっと自由な時間があれば、もう1度カヌーに乗ってみたいと思うのですが、たぶん体力がないのでシングルは“沈”する気がします。

そろそろ下の子のオッパイの時間かな。

最後に、ずい分前のことですが、カヌー部でお世話になった皆様にここでお礼を、本当にありがとうございました。

下手でしたが、水の上を泳ぐより速く遠くへ行けるカヌーを体験でき、たいへん楽しい青春時代となりました。

それは今にも崩れ落ちそうな建物だった。カヌー部の試漕会に参加することにした私は、西部構内でもひとときわ歴史を感じさせるその木造の建物に初めて足を踏み入れた。カヌー部のBOXは階段を上った2階にある。しかし、階段は新参加者を拒むかのように悲鳴をあげて威嚇する。この階段でほんまに落ちてまいそうやなぁ、とびびりまくりながら、階段をギシギシきしませつつ2階へ上がる。なんとかBOXにたどりついた。見知った顔がいてちょっと安心した。こんなところに部室を持っているようなクラブに入部して大丈夫なのかと不安になった。

そこは戦場のようであった。新歓コンパのあったその日、鴨川の河原でいやという程歓迎してもらった後、BOXに連行された。あちこちからうめき声が聞こえる。2回生の先輩が「大丈夫か」と言ってバケツを用意して、背中をさすってあげているようだ。トイレに行ったまま帰って来ない奴もいた。ずっとトイレで便器をかかえたまま過ごした、と後で聞いた。

そこには何でもあった。BOXの奥にはなぜか畳があった。畳の上にはこたつが置いてあった。ふとんもあった。そして何よりもマンガがあった。自宅通いだっただ私は、講義の合間によくBOXに行って時間つぶしをしていた。隣のスピードスケート部から聞こえる麻雀牌の音を聞きながら、「ワイルド7」など、カヌー部に入らなければ一生読まなかったであろうマンガをむさぼり読んだ。しかし2回生になると、新たなライバルが登場した。当時1回生の益川君である。2人で黙々とマンガを読んでいるのもなんだか嫌だったので、以前ほどマンガを読みに行かなくなった。

そこには何もなかった。前日にBOXからマンガを数冊拝借して帰った私は、翌朝登校途中にバイクで西部に向かった。ひとだかりができていた。

さすがに木造の建物だけあって、きれいに全部燃えてなくなった。ただ土台のコンクリートだけが残っていて、ここがトイレだったとこだ、ということがわかって妙にうれしかった。借り出したマンガがBOXの形見となった。とりあえずこのマンガは最後まで読めてよかった、と思った。

BOX火災による被災者達（応援団やNF事務局などもいた）で集まって、今後の対策を検討した。これには同期の三宅君が中心となって活躍してくれた。建て直しを依頼することも検討したが、燃えたBOXは東西2棟で組になっているので、仮に建て直すとしても無事だった西棟を取り壊してからでないとできないと大学側からいわれた。また、これまでのような自由な使用はできず、利用時間も7時～22時に限ってきちんと鍵をつけて管理するようにしなければならない、とのことであった。とても西棟の人達が納得してくれないだろう（自分としても嫌だった）。ちなみに、火災の原因については教えてもらえなかった。1階に置いてあった生石灰が発熱して発火したのでは、という噂話もきいたが、消防署に調査結果を尋ねるには、裁判所を通してお願いしなければならないらしい。とりあえず体育会にお願いして、体育館のトレーニングルームの一角にロッカーを置かせてもらい、そこが大学での居場所となった。いいんだか悪いんだか、他に行くところもないので頻繁に筋トレに行くようになった。でも、私のカヌーの腕は残念ながら上がらなかった。

卒業後にも何度か京大を訪ねたことがあるが、BOX跡をみると何だかノスタルジックな気分になる。24時間好きな時に、好きなように活用できた西部のBOXは、私にとって「自由を愛する京大」の象徴であった。

六車 和彦 (BYS06251)

E-mail: muguruma@cpl.toshiba.co.jp

近況報告

大高 健一（H4年卒）

8月に東京に転勤になり、OB会に住所の変更を連絡しておらず、寄稿の依頼の封筒が手元に届いたのは、原稿締切間際でした。また、過去の「河奴」も実家に置いたままなので、他の人の文章を参考にも出来ないの、思いつくまま近況の報告をさせていただきたいと思います。

私は、平成4年に大学を卒業後、協和埼玉銀行（現、あさひ銀行）に入り、4年間、四条烏丸にある京都支店にいました。最初の2年間は内部勤務（預金、為替、融資等）をひととおり行い、3年めから取引先係として、外まわりをやりました。銀行の外まわりというと預金集めを想像される方が多いでしょうが、ボーナス時期以外は、貸出金を増やすことを目的に法人を中心にまわっておりました。担当区域は、左京区、山科区、東山区が中心で、雨の日以外は、原チャリでまわっていました。雨の日と疲れた日は車でまわり、タクシーがいつもならんでいる吉田神社の横や、將軍塚の駐車場、北白川の住宅街などに車を止めてひとやすみすることもありました。また、京都大学にも週1回の集金があり、時計台の裏の経理に出入りしており、カヌー部の後輩と顔をあわせることもたまにありました。

今年の4月から4ヶ月間は、銀行業務から離れ、研修生として、関西生産性本部と言う所に行かせてもらいました。内容は経営コンサルタント養成基礎講座というコースで、講義、実習の他、実際に企業の診断を行うといった実践的なものまであり、短い期間でしたが大変充実していました。研修には銀行以外からも、生保、メーカー、システム関係の他、企業のオーナー2世も参加しており、皆、個性的な人たちばかりで、得るものも大きかったと思います。人数も22人とあまり多くなく、まとまりも良かった為、研修終了後も引き続き関西で勤務している人は、大阪で月1回は集まっているようです。

そして、8月に渋谷支店に配属となり、ついに念願の（？）東京進出を果たしたわけですが、タイミングが非常に悪いことに、ちょうど銀行に大

カヌー4年間について

(幹事) 平瀬 本宮

矢部 泰二郎 (前主将)

1 回生の4月の終わり頃、僕は初めて艇庫に来てカヌーに乗った。瀬田川の水は僕の家近所を流れていて小学校の放課後によく魚釣りをして遊んだ宇治川の水と同じ水であり、この川に何となく親しみを感じた記憶がある。

2 回生の時はただ無性にカヌーが速くなりたかった。しかし、試合で負けても別に悔しくはなかった。勝負にこだわるには実力も努力もあまりに足りなかったのだろう。

3 回生の時はカヌーを漕ぐのが楽しかった。レースに出るのが楽しかった。漕ぐたびに速くなるような気がした。いくら漕いでも疲れない気がしていた。

4 回生になった今年はただ勝負に勝ちたかった。というよりも負けたくなかった。負けない為にする練習はなぜかとてもしんどかった。しかし負けて薄ら笑いを浮かべるには今まで費やした時間や努力が大きすぎる気がしていた。

3 回生途中から1年間、僕は主将という役職に就かせていただいた。しかしカヌーを一生懸命漕ぐという事以外、自分がクラブの為に何ができるのかわからなかった。実際何をして良いのかわからないままに1年が過ぎてしまい部員の人、特に主務米島と会計宮本に迷惑をかけて悪いことをしたと思う。せめてこれから大学に残っている間くらいはクラブのために手伝える事があればできる限り協力させていただきたいと思っている。

最後に自分の近況報告ですが、僕は農学部水産学科水産化学という所に所属しており、現在卒論のためにいまいち訳がわからないながらも毎日実験をしています。実験をしているとカヌーを漕いでいたのがもう何年も昔の事であった錯覚を感じる時があります。そんな時は何か少し寂しい気がします。

まとまりのない文章ですみません。

(幹事) 二巻 浩夫

宮本 拓平 (主将)

先日部員の有志4人で比良の山へ登りました。あの琵琶湖周航歌にも出てくる”比良も伊吹も”の比良です。春合宿の時などに、コースから北の方角に見える雪をかぶった山に覚えがある方も多いと思います。

実は部で山へ行くのは私が主将になってから2回目です。1回目は大台ヶ原へ行きました。なぜ山へ行くことになったかと言うと、関選合宿の初日に一人だけいた1回生がカヌー部をやめたいと言いだし、我々の説得もむなしく退部してしまったのが事の始まりです。4回生が抜け4人だけになってしまったけれど頑張っていこうと思っていた時ただけに非常にショックを受けてしまいました。とりあえずクラブ内で試合や練習以外の何か欲しいという思いが残された3人に共通してあったのでしょうか、どこかへ行こうということがその場で決まりました。

私の今までのカヌー部生活を振り返ってみると、練習がつらくていやだなとか、土日が空いていたら他にもっといろんな事が出来るな、という思いは自分の中でタブー視していて、カヌーを一スポーツとしていい所ばかり見るようにしていました。しかし、新入生の入部する心境としては、そのようなことが障害になっていることが多いようです。OB・OGの皆様は現役時代どのようなことを支えにして日々の練習に臨んでいたのでしょうか。最近の学生はスポーツに打ち込もうとする者が少ないのでしょうか。疑問は絶えません。

比良の主峰武奈ヶ岳の頂上からは琵琶湖が大きく望めました。いつも見慣れているこの湖もたまにはちがった視点から見るのもいいものです。みんなでどこかへ出かけるという事が部員(とくに新人)を引きつける要因となるか、またこれから先こういったことが定着するかどうかはまだわかりませんが、少なくとも私自身は新鮮な気分を味わうことが出来ました。

(くま) 部員紹介 (帝王天、人間合戦) 食者 島米

一歩で、いち島米の題ですニッシャー！で、いち島米！戦う熱意が歯の白

島米をせこアキ思、いち島米を！焼くいち暗犬、樋口 太郎 (主務)

気取イーゴスむ再アハ！計き題サ、いち島米を主敵ア！気取イーゴス、いち

〈4回生〉景よア、六！も来ア見さいち島米が！さハ、いち島米を主敵ア

鷹尾 泰伸 (教育、甲陵、カナディアン) うハ提、すアいち島米！顔おの

鷹尾さんは大のマンガ好きで、家にはおびただしい量のマンガがあり、勉強は絶対にしてなさそうである。そして普通の人と少しずれた感があり、OBの人を1回生と間違えて「〇〇君」と呼んだり、バイクでしょっちゅう転んだり、2時間位甘い物を食べ続けたり、とまあ、いろいろあるが僕は尊敬している。

(君主、ベッスウ、時節、重荷、貴) 平沢 本宮

原山 友弘 (理、北野、カヤック) うア！光おうこさハ！いハ！難来式

原山さんはカヌーに対して大変真剣に取り組んでおられる。特に今年の夏、引退間近頃になってから熱心さはただならぬものがある。その理由は最後の夏だから・・・というのものもあるかもしれないが、語学の単位が2回生よりも少なく、卒業は当分無理だから勉強以外に目標を、というのが有力のようにも思える。そして来年もカヌーを続けるらしい。ということは卒業はさらに先になるのだろうか。

矢部 泰二郎 (農、水産、桃山、カヤック)

〈主回S〉

矢部さんは非常に練習熱心であられ数々の好成績を残されました。常に高い理想をお持ちで、我々の知らない所でも一生懸命に努力なされていたと思います。このようにカヌー一筋に頑張ってこられたこのお方もようやく第二次成長をお迎えになられたのか、最近では異性に興味があるご様子で、「“キャー！矢部くん、ガンバッテリー” みたいなオレ専属の黄色い声援ないかなあ」とか「“あの一私サンヨーのOLなんですけどずっとファンだったんです” みたいなのがあってもいいはずや」などとおっしゃり、さすがにこちらの方もかなり理想が高いようでございます。

米島 淳介（総合人間、天王寺、カナディアン）

白い歯が燦然と輝く米島さん。デレーッとニヤケ顔の米島さん。ブルーが入っている米島さん。矢部さんと戯れる米島さん。原チャでこける米島さん。スピード違反で捕まる米島さん。寸暇を惜しんで再びスピード違反で捕まる米島さん。いろんな米島さんを見て来ました。でも最も印象深いのは働く米島さんです。黙々と仕事をこなす米島さんです。そんな米島さんの飾らない、語らない背中に僕は何度も「頑張ってください」と。月なみではあったのですが、僕から精一杯の賛辞として。

〈3回生〉

宮本 拓平（農、畜産、浦和、カヤック、主将）

主将である彼は非常に練習熱心で、「オレ乗艇嫌いやから」と言って夕方乗艇しないということは決してなく、「オレ膝痛いから」と言って下級生が懸命に走っているのに自分は手を抜くということは絶対なく、「もう寒いし早朝練習やめよう」と自分から言い出すことなどおひさまが西から昇ってもあり得ない。そんな彼と最も気の合う部員はT君で、二人で「ヌレヌレ」「ウハウハ」などの言葉を闘わせてコミュニケーションを図っている。凡人には理解不能のハイレベルな会話に僕もついて行きたいと心中では思っている。

〈2回生〉

仲野 純章（総合人間、奈良女子大付高、カヤック）

松浦とともに今年10月から入部してきた彼は、一見ノーマルタイプではあるが、本性はまだ判明していない。練習で沈するたびに「寒い、寒い」を連発し、今にも凍死しそうな顔をしていることもしばしば。しかし、温かいシャワーを浴びればたちまち回復、ニコニコ顔になるが、懸垂を始めるや、「モーダメ」と唸り「虫の息」という顔になることもしばしば。とまああれこれ書きましたが、僕は密かに彼の来年の活躍に期待しているのです。

西向 裕相（農、生物機能、洛南、カヤック、副将、会計、学連）

「ニッシー」と呼ばれている彼は、愛嬌のある顔で、ただでさえずんぐりとした体にジャンパーを着て丸々とした姿がこれまた愛らしい。転学科に失敗し、落ち込んでいる風ではあったが、今は「2階からつばを吐いたらどう落ちるか」の方に興味がありそう。普段から手もちぶさたになる度に仮想パドルで空気を漕いでいるので、練習熱心ではあるようだ。

樋口 太郎（教育、弘学館、カナディアン、主務）

彼は色黒の九州男児で、かなり濃い口であるが、最近髪をばっさり切ってノーマルに近づいた。また教育学部という超マイナー学部の彼は大の子供好きで「子供が欲しい」とあやしくつぶやくこともしばしば。時には「美しい生き方って・・・」と考え込み皆を笑わせる。と、ここまで書くと繊細なのかなと勘違いしがちだが、彼は、消灯時間になるや否や、誰よりも早く高らかないびきを上げるといわず太い適応力も兼ね備えている。

松浦 哲朗（総合人間、金沢泉丘、カヤック）

今年10月に入部してきたアウトドアマン“てつお”。彼はアウトドアを極めるためにカヌー部に入ってきました。そんなてつお君は好奇心旺盛な楽しい人です。いろんなことに興味を持って、いろんなことをしたがる人ですが、困ったことにきれいな女の人がいるときだけは要注意です。鼻の下を長ーくのばして、いかにもいやらしい魚のような顔になるんです。でもそういう時以外では、てつお君は本当にしっかりした人です。

〈1回生〉

福田 光輝（法、高津、カヤック）

光輝で「コウキ」と読ませる。実家は教会で家族全員の名前に「光」の字が入っており、勿論キリスト教徒である。食事前のお祈りも欠かしたことはない。しかし、ここで、「敬虔なキリスト教徒」というイメージを彼に対して持ってしまうとまさしく術中にはまったことになる。彼の日頃の行動を挙げれば・・・シャレにならない恐れがあるのでここでは差し控えたい。と、まあ、あれこれ書きましたが、実は、彼は練習熱心で頼もしい1回生なのです。

(専学、情会、研) 平成8年度活動報告(11月24日現在)

1月 2日	初漕ぎ
1月 6日～ 7日	リーダーズ・アセンブリー (主将、主務) 於 大津希望ヶ丘ユースホテル
3月25日～22日	春合宿
3月25日～4月13日	瀬田 合宿(14日試合)
4月 6日～9日	新入生健康診断(新勧活動)
4月26日	京関戦
5月12日	新勧川下り 於 笠置
6月1日～15日	京選合宿(16日試合)
6月22日	京都府国体予選 於 久美浜
6月23日	大阪府国体予選 於 浜寺
7月 5日	新歓コンパ 於 天寅
7月10日～31日	夏合宿 (8月1日～ 4日 関学選)
7月17日	祇園祭バイト(白楽天山)
7月31日	近畿国体ブロック予選
8月 8日～27日	インカレ合宿(8/28～9/1 試合 於、琵琶湖)
8月13日～19日	盆休み
9月 7日～19日	関選合宿(20～23日 試合)
10月23日～27日	全日本選手権 於 戸田
10月26日	ドン・ドッチ・レガッタ
11月17日	駅伝大会(26チーム中14位)
11月30日	大掃除(予定)
12月 7日	漕ぎ納め、追い出しコンパ(予定)

*今年度は日程、人数の都合上、琵琶湖周航は行いませんでした。

平成8年度戦績

第33回 瀬田川カヌーレガッタ 4/14

K-1 10,000m 矢部 泰二郎 2位

K-2 10,000m 宮本-西向 5位

例年通りの水面状況で、各艇苦心のレースとなりましたが、主将矢部は意地を見せ健闘の2位。大穴の宮本（3回生）-西向（2回生）組は予想を上回る5位でした。

第33回 京都大学・関西学院大学定期戦

京大● 11-21 ○ 関学（通算15勝17敗1分け）

K-1 10000m 2-4

K-2 " 3-3（以上瀬田川レガッタの成績から）

K-1 1000m 2-4

K-2 " 2-4

K-4 " 1-3

K-1 relay 1-3

関学は選手層が厚く、少人数の私たちがまともに張り合ってもかなう相手ではありませんでした。ちなみに試合後は相撲大会や打ち上げで盛り上がりました。

第27回 京都府カヌーレーシング選手権大会 6/16

K-1 1000m 矢部泰二郎 3位

K-2 1000m 矢部-原山 優勝

宮本-西向 6位

K-1 relay 矢部-原山-宮本-西向 2位

矢部-原山組は京都で最も早いペアになりました。

最終学年ということで練習にも気合いが入っていたようです。

まだまだ何かやってくれそうな予感が・・・

全体として見ても部員たちの健闘は光っていました。

平成8年度 全日本選手権 10/23~27

4回生の原山のみ参加しました。

やはりレベルが高かったとのことでした。

第2回 京都大学・関西学院大学OB戦 10/26

現役部員はお手伝いをさせて戴きました。コンディションが悪く決勝はペアのみとなりましたが、皆さん楽しんでいただけたようでした。至らぬ面もあったとは思いますがご容赦下さい。なお、関学にくらべて京大のOBの参加が極端に少なかったので今後は奮ってご参加下さい。

第33回 ドン・ドッチ・レガッタ 10/27

K	1位	宮本拓平
	2位	矢部泰二郎
	3位	西向裕相
Jr & C	1位	樋口太郎
	2位	米島淳介
	3位	鷹尾泰伸

前日とはうってかわって絶好のコンディションとなりました。しかし、OB、OGの御参加が少なく残念でした。